

## 感染症と脳卒中

脳卒中では、手足の麻痺まひなどの脳の症状が突然現れる。治療は一刻を争うのだ。他人の都合や迷惑など、気にしているヒマはない。

70歳のAさん。隠れ脳梗塞と高血圧で通院していた患者さんだ。4日前に38度以上の発熱。咳せきが出て、体の節々が痛くなり、インフルエンザと診断された。その2日後、起床後、左足に力が入らず、ひとりでは歩けなくなった。「ひょっとして脳の病気が？」と思った。が、Aさんは善人。インフルエンザを他人にうつしてはいけしないと、自宅で経過をみていた。

だが、翌日になっても症状は良くならない。診察すると、左の手足に運動麻痺がある。MRI（磁気共鳴画像）では、右の大脑深部に脳梗塞が見つかった。0・1〜2ミリの細い脳動脈が詰まったところがある。脳梗塞である。

インフルエンザやコロナ感染には、脳卒中でもことに脳梗塞の発症リスクを高めるメカニズムがあるという。Aさんの場合は、

もともとの動脈硬化性変化によって細動脈の血流が悪かったことに加え、インフルエンザによる発熱や水分摂取量の低下などが相まって、細動脈に血栓ができ閉塞したのだろう。

脳梗塞の治療は、その種類を問わず、早ければ早いほど効果が期待できる。Aさんも発症4、5時間以内なら、血栓を溶かしてしまう血栓融解療法（t-PA静注療法）が可能であった。だが、発症から2日目では、治療法は限られる。脳梗塞は小さいが、後遺症を残す危険性が高い。

確かに、インフルエンザやコロナに対応できない医療機関はある。満床の病院もある。だが、「ひょっとして、脳卒中か？」と思ったら、医療サイドの事情などを考えず、救急車を呼ぶべきだった。それがはばかれるのなら、まずは、脳神経外科医や脳神経内科医に相談すべきであった。残念。

（石黒修三＝いしほろくりニック・脳神

経外科医… 28北國新聞掲載）